

緒 言

このたび奈良文化財研究所で開催された「東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会」では、中国・韓国・日本の東アジアで、理想郷としての思想にどのようなものがあるのか、また、理想郷の思想が庭園の形態・意匠・技術にどのように影響して、三国の風土や歴史の違いの中でいかに発展・継承してきたかを検討した。そして、日本でみられるような、仏の浄土世界を表現する「浄土庭園」において理想郷の世界がどのように表現されたのか、また、その普遍性・独自性はどのようなものであるのかについて検討した。

東アジアにおいて、植物・水・石など自然を材料として造形された庭園は、人と自然との関わりから創造されたものであり、その技術・形態が思想と結びついて理想郷という一つの庭園様式が生み出されたものである。

庭園文化の基層をなす人と自然との関わり方で、三国ともに自然崇拜・自然敬慕・自然を親しむなどの気持ちがあることや、『作庭記』にみられる名勝地や名山・湖の自然景観を写すことなどが、庭園の中に共通の意識として存在している。その一方で、自然の写実性について、方池と曲池、加工石材の使用、風水画法の取り入れなど、庭園形態・意匠において違いがみられる。

また、理想郷とはユートピア・パラダイス・仙境(桃源郷)・常世(不老不死)・極楽浄土などの表現で、道教・老荘・神仙・陰陽などの思想のもとに三国で発展してきたものであるが、時期や感情・意味で微妙な違いもみられる。

庭園における理想郷の表現として、その思想的背景と形態・意匠をみると、自然の精霊を崇拝するアニミズム(禊)・仏教的宇宙観の須弥山(須弥山石像)・不老長寿を求める神仙(三神仙島・蓬莱山)・無為自然の老荘思想の仙境(隠士文化)・極楽浄土(八功德水・七宝池・蓮池)などのほかに、陰陽五行・風水などがみられる。また、「神仙島」のように三国ともに共通するものと、「浄土」や「天円地方」(方池円島)のように独自の思想的背景に基づく庭園の形態・意匠もみられる。

仏の浄土世界を理想郷とみなし、それを具現化する「浄土庭園」の定義は、遺構や変相図や、浄土思想の厭離穢土・欣求浄土、顕教・密教、結界(聖-俗・彼岸-此岸)などの理念や、立地(山・川)・伽藍配置(臨池・宝楼・翼楼)・建築(住宅・寺院)・池(放生池・蓮池・宝池)などの形態・意匠、さらには、国家鎮護・追善供養・極楽浄土などの機能や儀式の総合的検討により、周囲の自然環境と一体となった本尊と仏堂と庭園が十方浄土を現世の寺院境内に空間的に浄土世界を再現した芸術作品である。なかでも日本の「浄土庭園」は、8世紀から11世紀にかけて「浄土庭園」の様式が確立し、最東端の辺境の平泉において、複合的性質をもつ日本独特の仏教思想に基づき、11世紀の作庭技術書『作庭記』の内容を具現化して浄土世界を体現した「浄土庭園」群は、顕著な普遍的価値をもつものであるといえる。

今回の国際研究会では、現在までのところ、中国・韓国では「浄土庭園」が盛行した形跡はみられないことが明らかにされたが、今後の発掘調査の成果などによる事例の検討も必要であり、また、日本でも、阿弥陀浄土院(8世紀、奈良)をはじめとして、「浄土庭園」の原初的存在に関する検討を進めていくことが重要である。

ここにとりまとめた「東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果が、東アジアのみならず、世界に所在するさまざまな理想郷の庭園の解明を更に一層進展させることを期待する。

「東アジアの理想郷と庭園に関する国際研究会」議長

田中 哲雄